

3. 北洋底魚漁業の現状と漁況の問題

岩崎史郎 (大洋漁業株式会社)

(1) 操業海区別操業隻数

北洋転換兼業船 (——)	48°以北	23隻		
〃 延縄刺網船	50°以北 170E~175W	19隻		
〃 専業船 (……………)		70隻	{ 以西 41 { 以東 106 { トロール 13 { 延刺 95	
母船式 19母船		255隻		

アラスカ試験操業 (~~~~) トロール 3隻

刺網 1母船 3独航船

W 175°以東 日米加共同保存措置海区 1~5

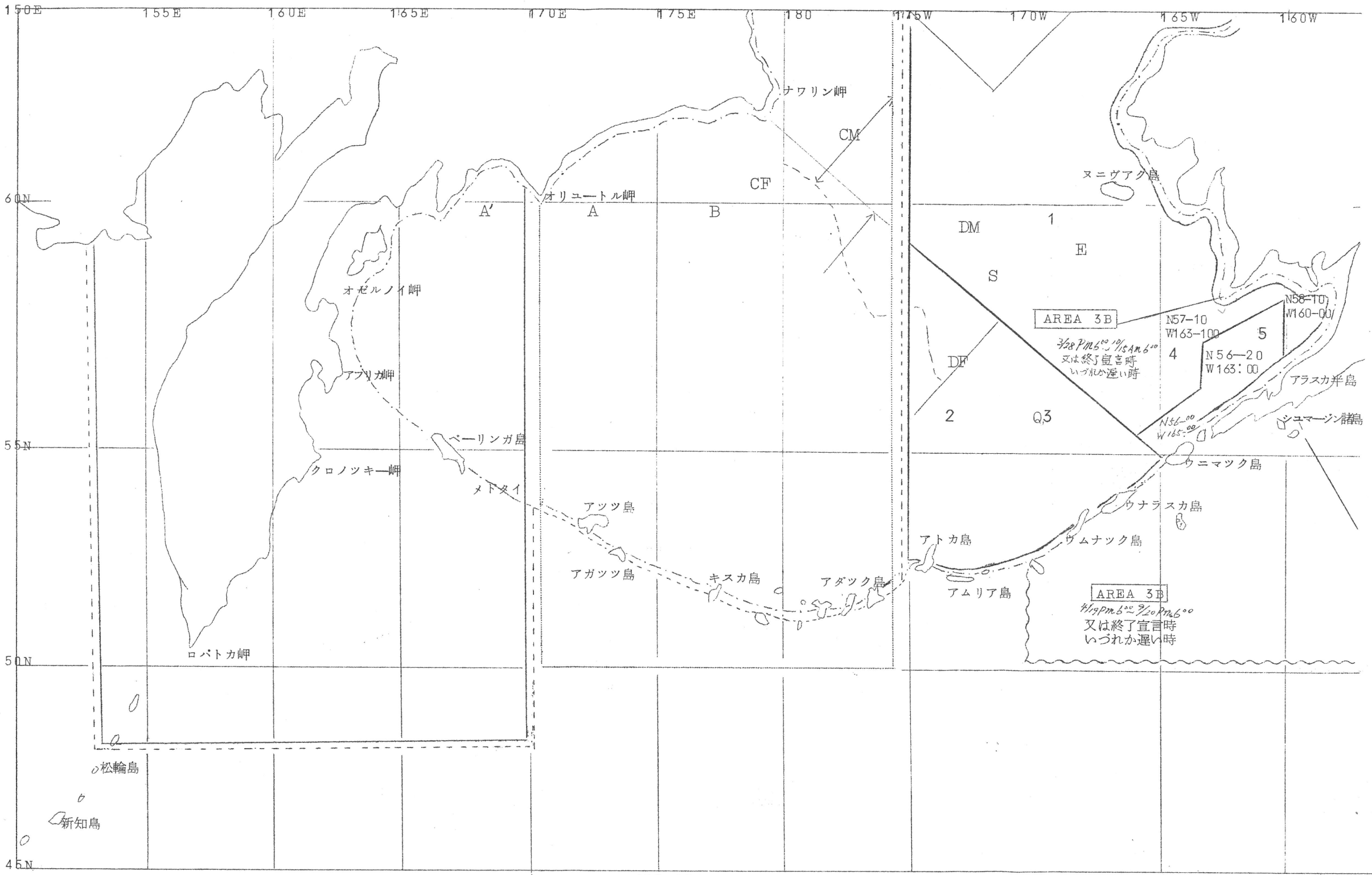
(2) 38年度母船式に依る海区別漁獲高

魚種 \ 海区	A	A	B	C	D	E	計
黄金かれい	97	14	1	1	224	20,679	21,019
あさばかれい	5	1,989	259	634	101	511	3,501
黄がれい					4	153	157
白 鰈		13	152	3,526	3,732	248	7,674
大 鰾	207	852	1,785	4,020	573	2,224	9,670
油 かれい		1,018	6,312	15,369	3,252	3,353	29,305
その他の鰈	562	914	209	2	22	112	1,824
た ら	1,125	3,601	4,176	3,044	1,917	1,347	15,212

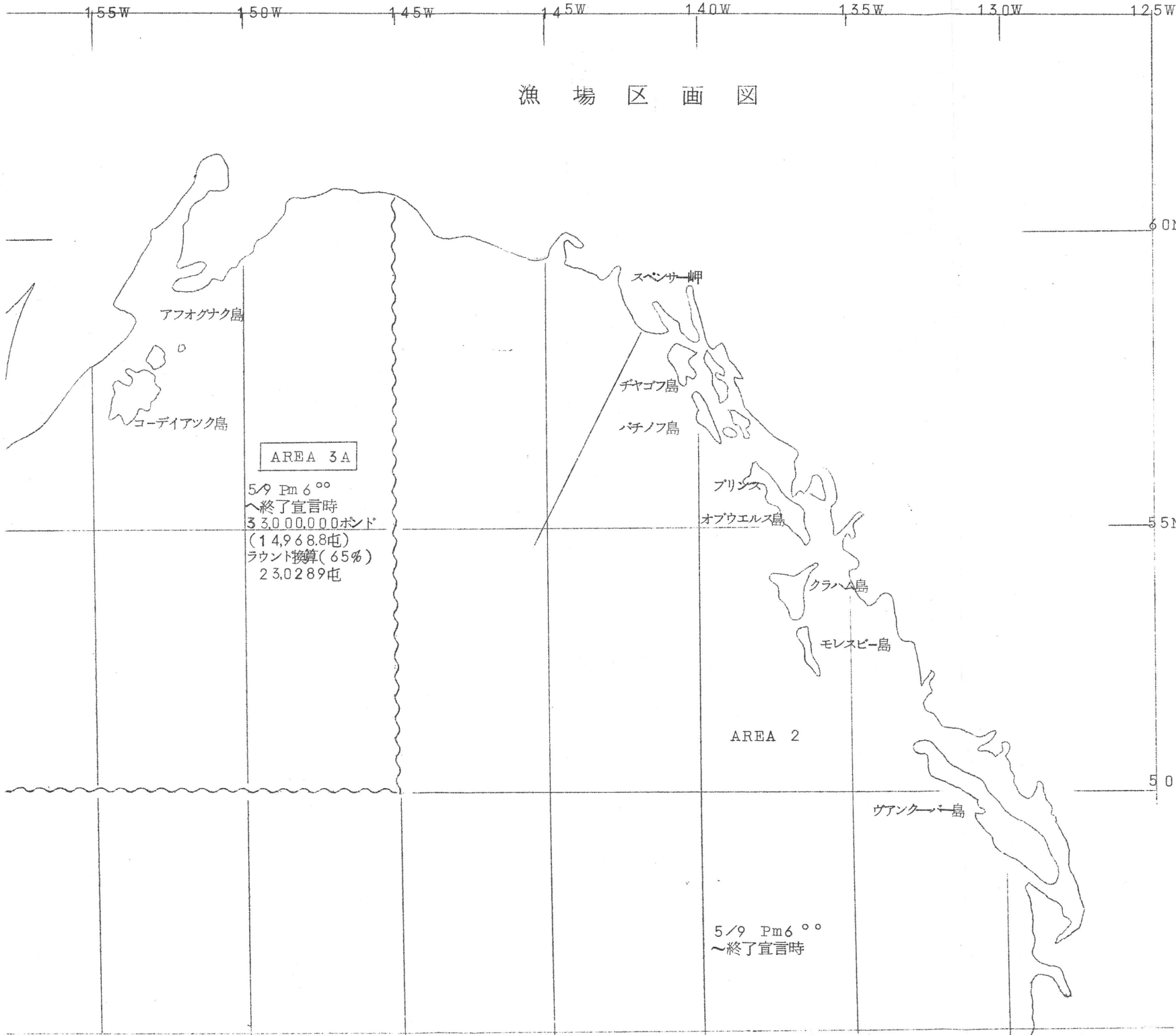
魚種 \ 海区	A'	A	B	C	D	E	計
助 宗	40	4,915	1,801	51,394	41,154	14,389	113,696
銀 た ら	728	1,572	1,881	6,127	1,866	7,455	19,633
アラスカメヌケ	303	883	5,062	6,386	1,853	3,367	17,796
キンキン	3	10	14	53	37	110	230
その他のメヌケ	926	460	219	212	159	309	2,288
ニ シ ン	21,396	9,570	173	55			31,196
その他の魚類	9	176	44	1			232
赤 え び				1,283	25,241	255	26,780
合 計	25,406	25,993	22,094	92,112	80,146	54,457	300,212
100 分比	8.5	8.6	7.3	30.7	26.7	18.1	100%

(3) 38年度 生産高

冷凍 83,149 吨
 ミール 29,031 "
 魚油 6,336 "
 ソリユール 1,816 "
 えび缶詰 371,000 %



漁場区画図



AREA 3A

5/9 Pm 6⁰⁰
 ~終了宣言時
 3,300,000ポンド
 (14,968.8吨)
 ラウンド換算(65%)
 23,028.9吨

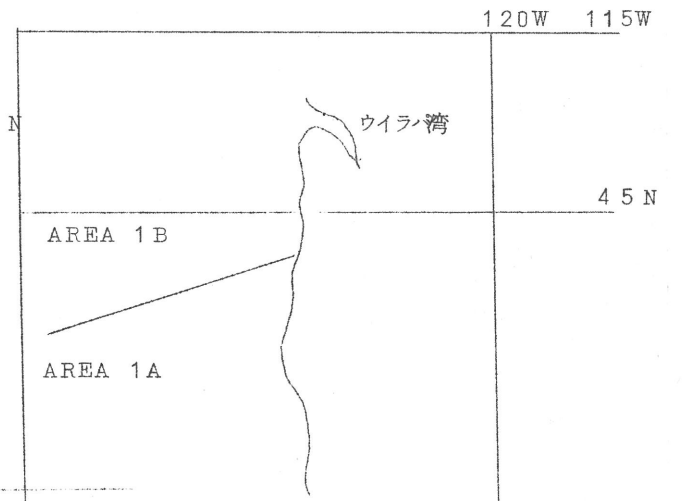
AREA 2

5/9 Pm 6⁰⁰
 ~終了宣言時

- 転換兼業船(——) 23隻
- 転換専業船(-----) 70隻
- 北洋はえなわさし網船(——) 19隻
- 母船式(-----)
- アラスカ試験操業(~~~~~)

19母船 255独航船
 2漁艇

トロール 3
 刺網
 1母船 3独航船



AREA 1B

AREA 1A

(4) 母船式底曳網漁業の船団数と漁獲高の変遷

	出漁母船数			出漁独 航船数	漁 獲 高	備 考
	冷	ミール	計			
29年	2		2	9	10, 125	北洋鮭鱈の裏作として発足
30	2		2	6	9, 056	北洋鮭鱈の裏作
31	4		4	12	22, 989	〃
32	4		4	13	24, 135	〃
33	3	1	4	33	47, 752	ミール工船錦洋丸発出漁
34	5	2	7	68	160, 152	ミール工船天洋丸発出漁
35	8	5	13	180	449, 935	ミール工船・廉進・壮洋・玉 栄参加
36	28	5	33	380	622, 743	
37	18	5	23	290	498, 582	
38	17	2	19	255	300, 210	ミール工船天洋・玉栄の二船団となる

(5) F海区の年次別月別平均水温と若干の考察

	36年	37年	38年
4月		2.60	
5月	4.0°C	3.48	
6月	2.56	4.49	2.63
7月	2.88	6.43	3.03
8月	3.10	6.01	2.68
9月	3.06	2.93	4.39

備 考

左記水温は底水温（水深 150~300m）

観測は正午

最近異常水温が問題となっているが、ベーリング海でも此の現象は見ら

れる。参考迄に記す。

上表は油糧工船天洋丸で観測したものであるが37年度6月初旬より表面、底水共急激な水温の上昇を見、油がれい漁の極端な不漁となっている。

38年度は36年並の水温だったが期待した油がれいの漁は無く、資源の減少が危惧される。

今后ミール原料としては助宗に活路を見出さなければならなくなると思われる。

4. 1963年北洋さけ・ます漁況について（説明要旨）

佐野 蘊（水産庁東海区水産研究所、水産
庁研究第一課（併））

さけ、ます資源評価には資源状態の過去の診断と将来の予測との二面がある。現在、日本側で一般的に用いている資源予測の方法としては、次の4つがその主要なものとなっている。

- (1) 再生産関係の分析からの回帰資源量の推定。（べにざけ、しろざけ、ます、などの資源分析）
- (2) 各年級群ごとの年令別来游量の間に見られる規則性の応用。（しろざけ、べにざけ資源の分析）
- (3) 未成熟魚の出現状態から翌年の来游資源量の推定。（べにざけ、などの資源分析）
- (4) 降海稚魚量から翌年の漁獲資源量の推定。（ぎんざけ、などの資源分析）

1963年春の第7回日ソ漁業委員会では日ソ双方の科学者によって、おたがいの分析結果を検討しあった結果、おおむね、北西太平洋に1963年に